



羽黒派古修験道「秋の峰」入峰



大柴燈祭



初度位山伏 貢晴

いでは かなび さんろう 出羽の神奈備に参籠

でわさんやまじんじゃ はぐろはこしゅげんどう あき みね にゅうぶ
出羽三山神社 羽黒派古修験道「秋の峰」入峰

平成二年度 出羽三山神社羽黒派古修験道「秋の峰」入峰

しよどい山伏 貢晴(こうせい) 事 田代貢一

娑婆在所 山形県酒田市宮野浦 1-14-11

「お立ちいー！」と羽黒山随神門はぐろさんずいしんもんに響く鋭い声。

ボォウー、ボォウー、ボボォウウー！と、樹齡四、五百年と思われる老杉うっそうが鬱蒼と茂る中に響き渡る法螺貝ほらがいの音。

老杉は空を蔽おほい、昼なお暗い。

出羽三山に連綿と続く羽黒派古修験道「秋の峰」入峰である。

山形県の中央に位置する出羽三山は、精霊しりょうの山「湯殿山」、行ぎょうの山「月山」、修験しゅげんの山「羽黒山」からなり、人皇第三十二代崇峻すしゅんてんのう天皇の御子、蜂子皇子を御開祖と仰ぐ。

一千四百有余年の伝統を有する羽黒派古修験道はぐろはこしゅげんどうの山伏修行は、「春夏秋冬」に四季各々の入峰にゅうぶがあった。その入峰でも「秋の峰」は、霊域となる羽黒山の杉木立の中に隠れて建つ吹越ふきこしの「峰中堂」かちゅうどうに七日間も籠もって厳しい修行を積み、生身の肉体のままに悟りを開く「即身成神」そくしんじょうしんを証得することが目的だと言う。

その「即身成神」への打ち込みが真剣であれば有るほど修験者の罪つみや穢けがれが消滅して神人合一の境地となり、更に獲得した神の力げんりき(験力)を活殺自在かつきつじざいに操る能力に磨きを懸ければ未来も予測でき、病氣平癒びょうきへいゆや雨告あめつぎ等と諸人の災厄さいやくを蔽ほらい招福しやうふくする超人間的な神力を発現

できると信じられ、古くから修験者によって受け継がれてきたのであった。

四季各々の入峰の中でも、特に「秋の峰」は、秘儀とされる「十界修行」に耐えねばならず、それは擬死再生を体験することであった。この内容を他言することは堅く禁じられているが、既に多くの人々に知られ、特に厳しきで有名な次の三苦行については、ご紹介に問題は無かるう？！

その一つは「水断ち行」である。顔を洗わず、歯を磨かず、髭を剃らず、風呂に入らずの垢だらけ、畜生道。二つには「断食行」である。「食食物は日に唯二度、其の一度の量、椀一つき半、汁一つきより外に何もなし！」、餓鬼道。最後は「南蛮燻し」である。籠堂の戸を全て閉じり、真っ赤に燃えた火鉢の炭火に秘伝の薬味を撒けば、忽ち燻れて堂内に濛々と煙が充満し、一尺足らずに居並ぶ修験者の姿を見失う程になる。この薬味は、煎り糠に唐辛子とドクダミの粉末を秘伝に倣って混ぜ合わせたものであった。薬味を燻した刺激性の強い煙は身体中の皮膚をピリピリと刺激して痛いほどである。敏感な目蓋と唇の周りは充血して火照り、特に咽頭や鼻腔を刺激する鋭い痛みは抑え難く、顔面全体を掻き毟る態となる。咳や嘔も止らず、涙と鼻が垂れる様は、息絶えに悶える地獄道！

こうした三苦行を含む「十界の修行」を繰り返す中に、一度死んで、地獄の苦しみを舐め、それまでの罪を購って新たに生まれ出でる、この『擬死再生』を身を以って体験することが羽黒派古修験道「秋の峰」入峰の本義であるという。この行法は現在まで羽黒派古修験道に行じた修験者だけが連綿と受け継いできた。しかも、これを経ないと修験者の資格が得られないほどに重きを成すと言う。日本全国に散らばる羽黒派修験者の出世の峰であったのだ。

私は新参山伏として出羽の神奈備に参籠し、古儀を厳修して年々変わることなく行なわれて来た羽黒派古修験道の尊い行法を体験した。

羽黒山中の峰中堂に向けての出立は、大斧役を先頭に出羽三山神社幟持ち、御神旗持ち、法螺役、笈立(鳥居)役、笈役(峰中では入峰者の精霊を宿す胎内とされている。また峰中神具を納めた笈具でもある)が続き、其の後には大先達、導師、講義、垂加、駈の役者山伏衆。続いて度位の新客衆(秋の峰に三度以上の入峰を果たした修験者に対する尊称)が行列を組んで、その最後尾には新客衆(入峰三度未満の新参者)が列なって進むのである。

この行列の進行中には数多くの拝所を周るが、概ね、行列次第は同様に、ボォーと法螺役が吹奏する法螺貝の音を合図にして総ての行法が進行するのであった。羽黒派修験者だけに伝授された独特の吹奏法による法螺の音は、一切の罪障の消滅を計り、神人合一の境地に誘う高德があると伝えられている。

行列が進む羽黒山頂には、日本でも有数の茅葺き入母屋造りの出羽三山神社合祭殿があり、朱塗りの大柱に支えられた大屋根までの高さは28メートルもあるという。

羽黒派修験者は、出羽三山神社合祭殿までの二千四百四十六段の長い石畳や、人が滅多に通らず苔生す古参道の急坂を静々と歩んで行く。その都度に羽黒派修験者の新客度衆の腰に吊るした神鈴がチャリン！チリンー！と澄んだ音鳴りで神域の清浄さを醸すのであった。移動する修験者の装束は、白衣の着物に、白と濃紺の市松模様を染め抜いた大袖の「摺衣」

を重ね合わせる。摺衣の背中と両袖には、吼えて威嚇し邪気を祓う「獅子紋」が象徴的に染められている。中国から密教をもたらした弘法大師の唐獅子伝播に所以する。霊的な躍動感に満ちたこの獅子は、守護の神であり、これから厳しい修行に立ち向かう修験者に相応しい図柄であった。

そして清浄な白袴を穿き、其の腰には鮮やかな朱色の貝緒(カキノウ・けんこのお=貝は女性の性の象徴で、これにつく縄の緒)を巻いて修験者の姿は威風堂々になるのであった。

足拵えは、山駈け荒行に耐え得る剣先脚絆に白地下足袋(または白足袋と草鞋)を履く。

三度以上の入峰を果たした新客衆は、首から太多須嬉を下げて修験の度位を誇示もする。新参の新客衆は、太多須嬉の代わりに紙縫りの「お注連」を掛けて、一目瞭然に新参山伏の体裁になるのであった。

前頭部には、山伏頭巾(不動明王が頭上に戴いている八葉の蓮華に倣った)一頭を戴き、左手に八角金剛杖を携える。金剛杖は、唯、歩行を助ける為だけではなく、除災の魔力があると信じられている。

総じて山伏姿はカッコいい?!のであった。

正午の出立から、何時しか太陽も西に深く傾き、夕闇が足元に忍び寄ってきた。

顔面に藪蚊の大群がブーンブーンと纏わりついて執拗に攻めてくる。

吹越の峰中堂は平屋の長い建物で、百五十人位の山伏が籠もって修行に精勤できると言う。

堂入り前に松明作法(男女の交わりと受胎を象徴)があった。講義と駈の二人の役者が反閤(鎮魂、邪気を祓う呪法)を踏んで悪魔祓いをしながら、燃え立つ夫々の一本の松明を左から大きく回す。夕映えの紅蓮の炎は空中に円輪の残像を描いて途轍もなく美しい!数度、振り手を大きく回し修験者の全身を紅蓮の炎で祓い清めていく。そして、高く振り上げた松明を苔生す参道の地面に、エイッ!とばかりに叩き突けたのである。パッ!と火の粉が散り、同時にボォー、ボォー、ボォー!と法螺貝が一斉に鳴り響く。

執り行われた「松明作法」の究極の一瞬であった。

感動した。目頭が熱い!胸がジーンと痛い!心身ともに清々しい!幸福感が満ちてくる!

この松明作法で心身に纏わり憑いた欲望や悪しき業を祓い禊て、愈々「入堂」である。

堂内には畳が一面に敷かれ、八十畳は優に有る広さである。

堂奥正面には大神が鎮座する祭壇の「神床」が一段高く仕切られている。其の手前には途中柱が一本も無い大広間の「大床」があり、この場こそ、新客衆(修験者)が不眠不休不臥に勤行三昧する夫々に割り当てられた畳半畳であった。勿論、気促な立居振舞はご法度の「床固め(不動)」の場になるのである。

堂内には電気の照明具が無かった。

天井の梁から、ガラスのほやに覆われた十本ほどの「灯油ランプ」が吊り下げられている。そして畳敷き大床の要所には、六台のレトロな「カーバイト・ランプ」が置かれていたのである。水とカーバイトが化学反応してアセチレンガスが発生する。このアセチレンガスが燃えると勢いの良い白い光が得られると、昭和20年代、主に炭坑夫たちに愛用された。私の

子供時代にも夜店の照明や夜釣りの手元の明かりとして使われていたと記憶する。

「ほやランプ」の灯芯の優しい揺らめきと、「カーバイト・ランプ」の力強い灯りが醸し出す、この空間の不思議さ、昔懐かしさがたまらない。

アセチレンガスが燃焼する瓦斯臭は、目の粘膜をチクチクと刺激し赤く充血させてしまう。おまけに「カーバイト・ランプ」と「ほやランプ」の油煙は顔面や鼻の奥まで煤けさせる。このランプが照らす空間は部分的で、修験者が座す大床おおどこの隅々までは灯りが届かずに大半が薄暗闇になっていた。

ほやランプの小さな灯芯がゆらゆらと頭上で燃えている。畳の上に置かれたカーバイト・ランプの炎は素通る足の動きに靡なびいて揺れ踊る。堂奥正面の厳かな祭壇では百ひやくもんめ 刃位の二本の灯明とうみとうが静かに燃えている。白しろの和蠟燭わろうそくの炎が、時に、瞬きを想わせるが如きに揺れるのであった。

薄暗い籠堂の隅々まで、尊厳でおかしがたい雰囲気満ちている。

これに馴染む修験者夫々ではあるが、何故か？「異様な雰囲気！」だけが漂ってくる。

修験道と言う「秘密の宗教世界（密教）」で鍛えられた強靱な精神態度が醸すのか？！或いは、娑婆しやばで叶わぬ事柄おこなひを大神いぢろに一縷の望みを懸けて祈りすが 縋る心の有様ありさまが醸すのか？！新客（新参者）の分際わかれの私が誤解や無礼を承知に端的な表現を行ってみれば、「異様な？！」「怪しい？！」「恐ろしい？！」となるのである。こうした娑婆世界では経験し得ない異様な雰囲気おそに篤く被おのわれて、心底に懼れおそ 慄おのくばかりであったのだ。

毛布が一人に二枚割り当てられた。

二枚それぞれを縦半分に折り畳み、掛けと敷き布団の代わりにするのだと言う。

百五十名以上の山伏が横になれば、長屋風の大きな籠堂のスペースとても目一杯となろう。横になってみたら非常に狭い。手足を自由に投げ出すこともできない。ましてや寝返りを打てば先輩度衆の脂ぎった顔が急接近！吐き出す息が新参山伏の顔を生暖かく吹く。

「これは遺憾」。仰向けて両手足を身体に添わせるキオツケへの姿勢を強いられそう。

先輩度衆から、要領を得ない初参の折の話を伺えば、行の合間の仮眠の時も、「行始め」合図の法螺貝が何時鳴り出すのかと気掛かりで、極度の睡眠不足に陥おちいってしまったと言う。

「オット！」こんな寝る行為への心配事、これ自体が娑婆しやば っ気ではないか。こんな心の有り様では修行への心の構えが整う筈も無い。これを戒めねばと、今から始まる諸苦行に思考を転じて見れば、一瞬にして私の表情も強張るのであった。不眠不休不臥ふみんふきゅうふがに除災招福祈願じょさいしやうふくきがんの「勤行」三昧。南蛮なんばん 燻いぶ しの地獄道じごくどう、垢だらけ畜生道ちくしやうどう、空腹に苛む餓鬼道がきどうなどの「十界じゆつかいの修行」。急峻な山谷を専らもつぱ 跋涉ぼつしやうし続ける「お駈行」。闇夜の護摩ごまた 焚たききで六根ろっこん（眼耳鼻舌身意）を浄化し煩惱を焼き尽くす「柴灯護摩行」など等と。窺うかがう、先輩度衆のどす黒い表情に輝く眼光の鋭さも一段と増さっていて、籠堂の薄暗闇の中でゆらゆらと怪しい。

少しの時の間、修験装束しゆげんしやうぞくを整理していると、突然に堂内隅から「壇張り一壇張り一」と叫ぶ声うかがした。急に先輩度衆が慌ただしく動き始める。

「段張」とは山伏言葉で新客衆の食事のことであった。

長さ一間、幅一尺ほどの食卓用平板の段張板が幾枚も手早く敷き並べられていく。段張板一枚を真ん中にして五人の山伏が向い合せに座り、忙しく配食する段張当番の動きを静かに目で追っている。

飯椀には既に舍利(ご飯)が盛り付けられていて段張板にゴトゴトと置かれていく。サッと夫々の手首が動いて飯椀を手前に引き寄せる。続けて「赤陀羅—赤陀羅—！」と叫びながら、ほとんど中身の無い味噌汁を柄杓で汁椀に入れていく。手馴れていて不思議とこぼさない。一瞬！周囲の山伏の視線が汁椀の分量に厳しく注がれた。行中最大の食の快樂の始まりに誰しもの眼は輝いて、生唾をごくりと飲み込む咽喉仏の動きに遠慮もないのであった。瞬間に人間本性の餓鬼道を曝し合う姿になっていた。

そして小平椀には小さな茄子二個が無骨な手で転がされていく。

行中段張は、時折、白い舍利の上に赤い梅干一個がのる。「何と豪華な食事だろう！」と感動するのは些かオーバーであろうか？！

「梅干一個の幸福感！」、行中に於ける私の真情であった。

段張板の前に整然と居並ぶ総新客衆を前にして、先達度衆の最古参となる床長が正座に構えて「さんじょう、さんじょう、ごさんじょう」と口上を尻上がりに述べ、両手に持つ二本の長い箸(散杖)を上下に二度振って畳を叩いた。

この「散杖触れ」で総新客衆の箸が一斉に動いたのである。

百五十人の全新客衆の「段張」の準備は、三十名位の段張当番が手早い作業でし終えた。

其の忙しい動きに合わせて舞う綿埃が凄い。更に凄いのは、「壇張り一」の叫び声に合わせて百五十名の新客衆が修験装束を一斉に整えて振るった綿埃の舞上がり様であった。私も慌てて装束を整えて、直ぐに段張板前に正座するままだに頭上のランプが照らす淡光の帯に目を配ってみれば、この綿埃が浮遊する有り様は一目であったのだ。

こうした中で食事をする羽目になど、到底、娑婆世界では想像もし得ない私目ではあったのだが。後に、この綿埃を嫌悪するよりも己の飢えを満たす食への欲望が勝って直ぐに慣れてしまった。こうして修験者の成長？を、先輩に負けじと立派に？！遂げることになる。

この食事の早いこと！驚きであった。ロ一杯に舍利を押し込み、赤陀羅をズーズズッと啜って、数回嚙んで呑み込むのだ。まるで娑婆世界の早食い早飲み競争の再現なのである。萎んだ胃袋の中に舍利が粒のままに急送されていく。こんな雰囲気には圧倒されたままの私も、目剥き急いでロ一杯に舍利を押し込み、赤陀羅をズーズズー！と啜った。先輩山伏は、白陀羅(白湯)を椀に入れ洗い、それで口を漱ぎ飲み、早くも段張は終わりそう。

直ぐに床長が段張の終わりを告げる作法を行う。神鈴を上下に振って「唱え詞」を一斉に始める先導をしたのである。此れを終えると暫時休息を告げる「床ゆるぎ一」の声が響き、総新客衆が一斉に「承けたもう〜」と応じたのであった。段張は、こうして一瞬？！のままに終わってしまったのである。私目の綿埃の心配事を物ともせず。

初度位入峰、「修行生活」の要領を一つ一つ身体で覚えこんで行く。

今は、すべてが珍しく、興味津々！愉快！愉快！の心境であった。

この段張後、少時間を寛いだ。すると突然、堂内にポォー！と大きく響く法螺貝の音。度吃驚である。それは一番貝(法螺)と称して、未明まで続く「勤行」開始の予鈴であったのだ。それからチョツとの間にポォー！と二番貝(法螺)の前鈴が響く。

一斉に、白と濃紺の市松模様が染め抜かれた山伏装束「摺衣」を整える動きが始まった。それに合わせる様に私も急ぐが、着慣れない装束の、その背中に摺られた獅子紋が皴ぐ。先輩度衆の着慣れを盗み見ながら、如何にか整えることができた。

ポォー！と一際大きく三番貝(法螺)が鳴り響き、本鈴を告げる。

直ぐに役者山伏二人が神床の祭壇前を出て、「床調(点呼)」を始めた。

駈入り順の入峰者名簿に照らし、一人ひとりの在所と氏名を読み上げて床決(修行する畳床の座位を決定すること)を行うのであった。

名前は山伏名で呼ばれ、その返事は「ハイ！」ではなく、常に「承たもう〜！」と、時代調！歌舞伎調？の声音で答えるのであった。

新参の新客衆は、この時点では山伏名の命名が無い為に娑婆世界での俗名で呼ばれることになる。私の場合には「山形の縣(あがた)酒田市宮野浦に住める、たしろ〜のこういち〜！」という具合である。

座位は祭壇から見て、大床中央より左床と右床に分けられて、それぞれ縦三列に座る。

左床には入峰を幾回も重ねる古参の山伏度衆、右床には入峰を重ね始めた新参の山伏衆が役者山伏の指図で座るのであるが、入峰半ばまでは「駈け入り順(入峰発意のままに早く駈け入った新客順、入峰後半は峰入を重ねた新客の度位順に床が決まる)」の床調が淡々と進むのであった。堂内には一つの咳も漏れず異様な緊張感が漲っている。私の心臓はこの緊張感に圧倒されてドキッ！ドキッ！と今にも張り裂けんばかりに高鳴っていた。

こうした中に「お迎えー、お迎えー！」の声と、これに応じて「承たもう〜！承た〜！承たもう〜！」の声。大先達が静々と控えの間より入堂し祭壇に拝礼したのである。そして祭壇右前の御座所に厳かに着き総新客衆と対面した。他の役者山伏衆の導師、講義、並加、駈も祭壇両側上に居並び、五先達役者衆と新客の全入峰者が参列し終えたのである。

数秒の間を置いて、導師が申渡しの口上を切る。「新客衆！」「承たもう〜！」「此の処は秘密の道場にして当派の極果に至る所なれば、たとえ親子、兄弟たりとも他言は堅く禁制でござる！」。「承たもう〜！」。「もし他言を致さば立処に御開山の御罰を被るであろう！」。

私はこの申渡しに驚愕し、唯、「くわばら！桑原！クワバラ！（落雷・災難・いやな事などを避けるために唱える呪の言葉）」の一念ばかりとなった。秘儀十界への興味は尽きないが、「他言は堅く禁制」の申し渡しであれば、これ以上に羽黒派古修験道への関心の一筆を進めることは出来ない。そして今後にも難行修練を重ね続けて永き伝統を有する尊い行法の奥義を極めようと堅く決意した今、禁制破りの「山伏破門！」の憂き目は絶対に避けねばならぬ。

「くわばら！桑原！クワバラ！」と呪文を幾回も唱え、急ぎ総括に移ろうではないか！

羽黒派古修験道「秋の峰」入峰は擬死再生を体験することである。この十界修行は、一度死んで地獄に墮ち、餓鬼、畜生、修羅、人間、天の「六道の愚かしい生き方の境遇」を彷徨

い、生前に犯した罪、穢を消滅させ、声聞、縁覚、菩薩、仏の「四聖四界の悟りの境地」に至り、新しく生まれ変わることだと言う。

更に修験を収める重要な行法には、専ら山河を跋涉(無心に山河を駆け抜く荒行)する抖擻行があり、これが繰り返された。

連綿と受け継がれて変わることがない抖擻行では、御開山の「蜂子皇子」が座禅をした処と言われている御滝神社の「中台の拝所」、出羽三山の主峰、標高1980メートル「月山登拝」、古来より修験者の聖地であった「東補陀落」、下って竜神が棲むという「御浜池」へと、抖擻行に明け暮れる峰中生活が続くのであった。

そして拝所の中でも最大の秘所と言われ、蜂子皇子が洞穴籠行をした「三鉢沢の急峻崖」への遥拝と、無事の出生を願う「形篁」への参詣、最後には蜂子皇子が羽黒の森に分け入って一番初めに籠り修行をされたと言う「阿久谷」への参詣が抖擻行の総締め括りになるのであった。

何処の聖地や秘所への抖擻行も、言語に絶する苦行であった。大昔には、修験途中の山伏が抖擻行に「へたばる」などと、こうした修行構えの怠慢は、「山伏の大法」に諮り、懐中の短刀で腹を割るか、腰に巻いた縄を使って首を括るなどと、「入峰覚悟(自害)」の厳修さがあったと言う。

まさに入峰は命懸けであったのだ。

この抖擻行の中で、私は一つの行成果を獲得できた。

それは先輩度衆の導きで「月山登拝」と聖地「東補陀落」と「御浜池」への「三山駆け荒行」に挑戦し達成できたことである。

急峻な崖谷をまさに天狗の如くに駆け抜ける！心臓は破れんばかり、顔面は真っ赤に硬直し、呼吸は唾を飲み込めないほど荒く、両腕は灌木の枝葉に擦過して血が滲む。地下足袋を尖る岩の端くれが情け容赦なしに突き責める。導く先輩度衆の強靱な肉体と精神に後れを取って、幾度、「此れまでかあ～！」と思ったことか。

この「三山駆け荒行」は、たった三名だけが兆戦し、達成できた得難い成果であった。

山伏修験道は罪や穢れを祓い去り、「即身成神!」を目指す苦行である。これは偏に己の罪業の為ばかりではなく、諸人の罪業を引き受けて、その難儀を救う苦行なのである。日日、わが日本の国体を安寧し諸人の招福を祈る羽黒派古修験道の羽黒山伏は、「国土の集団に他ならない!」。

新参山伏の頬はゲツソリと痩け、眼光の鋭さが異常に猛る。顔髭は不精に伸び放題、髪は乱れて絡まり、白袴は汗と泥で黒染み、垢に塗れた身体から例えを憚る悪臭を放つ！

最後の絞り力を左手の金剛杖に溜めて、籠堂大床の杉の敷板を捲れ房った杖尻で強く打つ。

「ドーン!」「オー!(産声)」と猛声して立ち上がる。

「新参国土の出成りい～!(出生)」である。

平成2年度 出羽三山神社 羽黒派古修験道「秋の峰」

初度位入峰 8月26日～9月1日までの7日間

※当「参籠記」は、出羽三山神社崇敬会の社報「出羽三山」に平成二年秋季号と平成三年春季号とに、二回に分けてご掲載の栄誉を頂戴しました。

お蔭を持ちまして篤信の出羽三山神社崇敬講社(会長・酒井忠明)の方々をはじめ、出羽三山に詣でる全国の参拝者や、羽黒派古修験道に行ずる羽黒山伏の諸氏にも、ご一読の機会を得ましたことは望外の喜びでございました。

この点、今は亡き、出羽三山神社第二十一代宮司(明治以前は別当と呼ばれており、それから数えると百一代目となる)「林 正近(羽黒派古修験道・大先達)」様の御影を偲びつつ、ご生前の折にお引き立てを賜りました事に対し、平伏致しまして御礼を申し上げるばかりでございます。

ありがとうございました。